

ないが、鏡古泉器物の形式などから推して後漢末期に比定すべしと述べ、従つて、石巖里の二墳は更に年代を溯り、前漢末期から後漢初期にあるものと結んで居る。附録として吉川學士の樂浪出土漢匱圖像攷證なる一文がある。博引傍證至らざるなき攷證であるが、唯愆を云へば行文に句讀點を用ひる親切が欲しかった。一般の讀者に對して文章に於ける理解の容易と正確とは學術的論述に關する限り少しも其の價値を害ふものではないと思ふ。猶又濱田博士の英文の綱要が載せられ、これは簡にして要を得たものである。(圖版百三十餘。朝鮮古蹟研究會發行)

(小野)

○北佐久郡の考古學的調査

八幡 一郎著

本書は同じ著者の『南佐久郡の考古學的調査』(昭和六年刊)に繼いでその一半を形成するものである。これによつて信州千曲川最上流の一盆地、佐久平の考古學的調査は一とほり完成したわけである。これほどエキゾース

ティヴに調査された地域は全國でも稀であつて、その點甚だ重要な文獻であると云へる。かくて考古學における地域調査なるものが如何なる觀點から、従つてまた如何になさるべきかとの論議にも一つの焦點が與へられたのである。從來とても地域調査が皆無ではなかつた。鳥居龍藏博士の上伊那、梅原末治氏の鳥取縣、島田貞彦氏の滋賀縣における調査や、地方史の一部においては自然に行はれてゐたが、それらは現行行政區劃を基とするもので何ら必然性をもたない。本書が特に地理的な最小單位を取上げたのは大いに學問的な意味を異にしてゐる。いま端的その成果に就いて見るに地理的な概括を行つたところは成功してゐる、遺跡の地貌による分類統計とその平面的・垂直的な分布を問題にしてゐるところは確かにひとつの結果が獲られた。しかるに時間的推移を論ぜられる「考察」の部はやゝ冗長に失し、この地域調査からする特別な結果はほとんど出てゐない。これは地域調査の一般的な成果を暗示するものではなからうか。即ち、地域調査である故にその地域そのものとしては甚だ重要な結果

があがるに反し、日本文化の推移全體から云へば必ずしも常に重大な問題を提示するとは云へないのである。日本全域に亘つて地域別の精査を行ふといふことは

一個の理想にすぎない。また必要な地域調査すら不統制な考古學界の現状では望み難い。だから範圍としては地理的な最小單元に據るとしても、どの土地を選ぶかといふことにはまたおのづから別の理由がなくてはなるまいと思ふ。南佐久と北佐久が別々に上梓されたために著者のいふ地的單元、佐久平についてはなほ充分な地域的考察が發表されてゐない。これは著者が文中において豫約されることであるから、われわれはその公表を期待して俟つことにしよう。とにかく、本書は色々な意味から重要な著述で、個々の點には異論もあらうが、學界に裨益するところは甚大であらう。たゞ、地域調査として、どう考へても淋しく感ぜられるのは全然發掘調査が行はれなかつたことであらう。しかし、この地域調査を標榜した著述の出現によつて、もし將來一遺蹟の發掘報告が従前よりも一層に同地域内の諸遺蹟を考慮して行はれる

とすれば著者の希望は別の形において大いに達成せられるわけであらう。(四六倍、二三二頁、圖版四三地圖三、挿繪一三〇、昭和九年、北佐久教育部會刊)

○日本上代の甲冑 末永 雅雄著

本書は著者が十年以上に亙る努力の結晶であつて考古學界稀に見るところの力作である。著者は京都帝國大學考古學教室に關係せられるとはいへ、資料の蒐集その他ほとんど獨力をもつてこれを行ひ、また適當な指導者を得られたとはいへ、ほとんど未開拓のこの分野にこれだけの體系を與へられたことは近來稀に見る快事と云はなければならぬ。まづ序説において日本甲冑史に輕い展望を與へ、その最初の一節として上代甲冑を取上げたことを明らかにし、第一章總論では使用せんとする部分名を規定し、質料による形式別をたて、第二章では古墳出土の甲冑、第三章では奈良時代前後の甲冑、第四章では古文獻に現れた甲冑を考察してゐる。文獻による考察はかう云ふ場合もとより實物に側光を與へるにすぎないも

のであるし、奈良時代前後の甲冑といふものは至つて資料が少ないので、著者の最も力を注いだ點は第二章にあるといへるであらう。冑を衝角付冑と眉庇付冑、甲を短甲、挂甲に大別し、從屬及びそれらの著裝法をも併せて詳論し、殊にその中に屢々見られる復原的研究は從來あまり試みられなかつたもので、考古學の研究法からいつても特筆に値すると思ふ。第五章考論においては古墳出土品がその伴出遺物や古墳の構造から年代がほぼ考定されるところにも、地理的には九州に短甲の多いこと、近畿に短甲、挂甲の併存すること、關東に挂甲の優勢で、しかも形式の變化して藤原期以降の甲冑に相通するもの、多いことなどを指摘した。最後に上代甲冑の源流を考へるために東亞の甲冑を概観して、挂甲と眉庇付冑との淵源を大陸にありとし、短甲の臺灣や南洋の系統であるとする説を斥けなほ未定の問題なりとし、さらに上代甲冑の推移をも考へて後代の式正鎧の成立にまで論及してゐる。誠に秩序ある結構といふべきである。著者の努力と熱意とは充分に認められてあまりあるが、なほ欲をいへば考

論がやゝ明晰を缺き、推敲がもうひとつ充分でない憾がある。即ち、挂甲、眉庇付冑の大陸起源や式正鎧成立の過程を説くところ甚だ妥當な解釋であると思はれるけれども、讀中さまざまの疑問が生起するを禁じ得ない。ともに資料の乏しいためであらうが、著者の重ねての奮闘を煩したい。(四六倍、三八三頁、圖版一〇五、挿繪一四七、昭和九年國書院刊、十八圓)

O. J. G. Andersson; Children of the
Yellow Earth. translated into English by

Dr. E. Classen. London 1934.

Dr. Black への獻本の辭を卷頭とした四六版、三三七頁の本書は、支那彩色土器の豫報的報告の出版後、十數年の今日、アンダーソン博士によつてもせられた初めての成書である。それは新發表の多數の寫真を載せられてゐるけれども、氏の序文に云ふ如く専門的な目的の爲といふよりは、寧ろ一般人士の座右の書として書かれたものであつて、所謂支那石器時代及金石併用期に亙る研

究の爲には、當然氏の會ての二三の報告に據らねばならない。氏は十數年前のそれらの報告に於て、展開せられたる意見と、其後の雜誌上になされた見解の一般的紹介である事とことわつてゐる。本書の前半に於ける地質學的分野と、全體に散見する地質學上の解説とは、其方面に於けるエキスパートたる氏の姿を明確に描出してゐる

又子安貝や、所謂葬文 death-pattern 等を中心として論述されて行く支那古代の *cult* の研究は氏の民俗學的方面への關心を物語るものがある。かゝる行文のインテリブルを多數のエピソードを以て充填しながら、氏の甘肅省を中心として行つたエキスカージョンの記録を、青海に於ける彩色土器遺蹟の如き未發表の遺蹟の報告を織込んで、面白く書綴つて行くあたり、全く愉快な一つの讀物である。かゝる文體の本書を結ぶのに、彩色土器の中心時期をなす仰韶期に於ける文化状態を以てしてゐる。そこには、米の栽培の存在を探り、或は、氏の年代觀の訂正と舊石器時代及び殷墟の時代への聯絡を思ひ、未だ世に再現しない古代文化の道行のマイル・ストーンへの思

慕の情を切々とつらねてゐる。實に肩のこらない、而も學的な書物の一つの標本とこそ本書は云ひ得よう、左に各章目次を擧げて置く。

The First Signs of Life.

Prehistoric Swamp Forest.

The Giant Saurians in Shanung and the First Mammals.

How the Mountains came into being.

Dragons and Dragon-Bone Mines.

The Peking Man.

The Yellow Earth.

Pleistocene Man in the Ordos Desert.

The Face of the Earth Giant.

We discover the First Prehistoric Village.

A Cannibalistic Sanctuary.

Ancient Implements and Vessels.

We follow the Yang Shao People to Kokonor.

The Gift of the Old Madman.

Archaeology takes Charge.

The 'T'ao Valley.

The Living in the Valley and the Dead in the Mountains.

Fecundity Rites, Hunting Magic and Death Cult.

Aphrodite's Symbol.

The Symbolism of the Pan Shan Graves.

The Yang Shao Civilisation.

Index.

(中村清兄)

O Thiel, Erich; Verkehrsgeographie von Russisch-Asien. Osteuropäische Forschungen. Band 17. 308 Seiten, 7 Karten und 31 Abbildungen auf 16 Tafeln. 1934.

O. Hoetzsch 教授監輯の下に月刊雑誌 Ost-Europa 及び叢書 Osteuropäische Forschungen を發行し、ロシア或は東歐諸國の經濟事情の調査に活動して居る獨逸東歐研究會(Deutsche Gesellschaft zurn Studium Osteuropas)は叢書の第十七卷に本書を出版した。

Thiel は序文に於てロシアの統計資料の蒐集に困難な事情を述べて居るが、多數のロシア語の文獻を使用してその缺を充分補つて居る。本書は約三百頁に達する可なり大部の著書であるが、その構成は一般の交通地理學に關する著書と同様に總論と特論に分れ、總論に於ては「自然と交通」「人類と交通」「交通機關とその分布」に、特論

に於ては「水上交通」「陸上交通」「航空交通」「通信交通」の各章に區分されて居る。

その中「自然と交通」の部分に於て氣候との關係が、多く述べられて居るのは、シベリヤの如き地方に於ては、當を得た方法であらう。また「交通機關」の章に於ては、各種の橋、獨木舟、筏等の説明があり、民族學的にも興味ある文字と思はれるが、卷末の僅かな寫眞だけでは、細部の構造を理解し難い感がある。オブ、レナ、エニセイの諸川は封鎖的な北極洋に注ぎ、結氷期の長い缺點はあるが、水路の便の乏しいシベリヤでは矢張り交通の大動脈をなして居ると云はねばならない。従つて「水上交通」の内陸水路の部分に最も多くの紙數が割れて居る。

のみならず著者も亦得意とする所らしく、その記事は一つの水路誌となり得るほど詳細である。「陸上交通」では各地の主要道路を記載し、更にシベリヤ鐵道を始め多くの鐵道に就て述べて居る。

要するに本書は理論的な何かを求め様とする人にとつては得るところがないであらうが、斯る交通誌とも稱す